

草津市立矢倉小学校通信 令和2年3月17日 NO.20



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

現実を受け入れ、前を向いて

3月に入ってすぐに臨時休校となった。年度末にしかできない「しめくり」にちなんだ6年生を送る会や学習発表、大掃除などの活動も、与えられたわずかな時間で取り組まねばならなかった。思いもよらないことは、突如として降りかかってくるものだと、身に染みて感じさせられた出来事だった。しかもその臨時休校にまつわる一騒動は、1日や2日、子どもたちと過ごした最後の数時間だけで終わるものではなかった。その後も刻々と変わる状況に応じて、さまざまな連絡、指示が学校へ送られてくる。目まぐるしく変わる現実をうまく受け入れられていない自分に気づかされる。心がものごとの展開についていけないのである。がらんとした教室、廊下を歩きながら、子どもたちが残した掲示物、明日にでも登校して来そうな砂だらけの靴箱など、いつもならなんでもないはずのことが目にとまると、こんなことを語っておきたかった、あんなこともさせておきたかったと思えてくる。

帰宅すれば新型コロナウイルス関連のニュースと並行して、9年前の東日本大震災関連についても報道されている。自分だけが助かったことによる後ろめたさと、だからこそ、その人の分も引き受けてしっかり生きていかねばと奮い立つ姿、未だに避難生活を強いられ心が折れそうになっていること、遅々として進まず、先の見通しも示されない復興の問題、あれほど手に入れたかった新しい家の生活に、さほど幸せも感じられないことなど、現実をいかに受け入れ、生きていくのかということが話題となっていた。

どうかするとこれからどうなるのだろうか、気が重くなっているところに、子どもたちの明るい声がこだまする。「子ども預かり」で、教室ですごしている子どもたちの声である。行くと、いつもと同じ笑顔がそこにはあり、「あ、校長先生や。」と、はずんだ声が心を和ませる。子どもはいつも生き生きとしている。明日へつながる希望だ。

やがて4月、新年度がやってくる。人は、現実をいかに受け入れ、前を向いて生きていくことができるのか。どのようなくらしが人を元気にさせるのか。今の世は、何が起こっても不思議でない世の中だ。これからの社会を生きていく上で避けて通ることのできない根本的な問題として問い続けていきたい。

校長 大林 道範